Kalafina Harmony Magazine

2018 Autumn #05

Contents

Staff

Art Direction ⇒ 鶴羽高章
Edit & Text ⇒ 芳崎志保

Wakana

Wakana

Photo ⇒ 能美潤一郎

Kalafina"Wakana"
・龍 真咲 シンフォニーコンサートwith
ローマ・イタリア管弦楽団
2018.08.11(sat)東京オペラシティ コンサートホール

出演者：Wakana(Kalafina)、龍 真咲、小川真奈

ローマ・イタリア管弦楽団と夢のような競演を果たしたWakana。
新たな一歩を踏み出した彼女のステージをレポート!

Text ⇒ 大西智之

うっすらと漏れ聞こえてくる弦楽器のチューニングの音が静かに高揚感を煽っている。

8月11日、東京オペラシティ コンサートホール。音を自然に反響させる共鳴体の役割も担う天然木で纏められた内装。2階席、3階席は壁沿いに数列のみで、天井まで吹き抜けとなっている。

この格調高い場所でWakanaが初めてソリストとしてステージに立ち、歌を歌う。

演目は『Kalafina"Wakana"・龍 真咲シンフォニーコンサートwith ローマ・イタリア管弦楽団』。来日したローマ・イタリア管弦楽団とWakana、そして龍がそれぞれ共演するのである。開演予定時刻の16時を少し回ったところで客席の電気がフッツリと消え、まずステージにローマ・イタリア管弦楽団が登場し、席に着く。準備が整ったところにコンサートマスターのアントニオ・ペッレグリーノが現われて、「ニュー・シネマ・パラダイス」が奏でられる。指揮台の横にひとり立ち、旋律を弾くアントニオ・ペッレグリーノのバイオリンを中心にしたオーケストラの音色は温かで、観客の心をほぐし、惹き込んでいった。

その演奏の余韻が残る会場の下手ステージ袖から指揮者のニコラ・マラスコと、腰もとに艶(あで)やかな黒をあしらったシックな白いドレスに身を包んだWakanaが出てくる。指揮台の横に立った彼女は深く一礼をし、オーディエンスをキラキラした眼差しで見渡してから、ニコラ・マラスコとアイコンタクトを取る。タクトが振られてゆったりとしたバイオリンのアンサンブルが鳴り、Wakanaがそっと歌を乗せる。曲は「oblivious」だ。チェロ、コントラバス、フルートにオーボエ、トランペット……幾重にも楽器が重なって曲を紡いでいく。澄んだ歌声が高い天井から振ってくる。響き合う音たちは、楽曲内で生きる2人の主人公の心の高まりを描くようにクレッシェンドしていき、そして彼らの未来を祈るように優しく溶けていった。

「みなさん、こんにちは」

とWakana。そしてこう言った。

「みなさんにお会いできるのをとっても楽しみにしておりました」

それは想いの詰まった一言だった。

Wakanaがローマ・イタリア管弦楽団を改めて紹介し、ピアノが弾き出される。そのピアノ1本を伴奏に、静謐な空気を纏い歌われる「君が光に変えて行く」。透き通った歌は大きくうねり、流れゆく小さな涙の一粒に溶けた悲しさ、儚さと、それらが姿を変えた未来への希望を紡ぐ。入って来た楽器がその希望を豊かに彩る。流麗なピアノに導かれた「傷跡」では、優雅な演奏とエモーショナルな歌がホールいっぱいに広がる。それは込み上げてくる感情を受け止めてこの先を生きる、という意志に溢れた一歩の力強さを感じるものだった。

今夜の公演には女性2人、男性2人のコーラスがいる。「oblivious」、「傷跡」でも彼らは歌声を重ねているが、あくまで主旋律はWakanaがひとりで歌う。3声で表現してきたKalafinaの曲を新たなアレンジで届けるその歌は、楽曲が内包する世界や感情に違った角度から光を当て、伝えてくる。Wakanaという歌い手が重ねる願いや未来が混じり気なく心の奥底に浸透してきて、新鮮な風を運んでくるのだ。

ここでWakanaは龍をステージに呼び込み、一度ステージから去る。

引き継いだ龍は、気品ある黒いドレス姿で映画音楽をテーマにした楽曲を披露。宝塚歌劇団を始めとしたキャリアで身につけてきたエレガントさで、オーディエンスを楽しませた。

＊

20分の休憩を挟んだ第2部、定位置に着いたオーケストラがスピーディでダイナミックな演奏を始める。そして上手から淡いピンクのドレスを着た小川真奈、下手から鮮やかな青いドレスを着たWakanaが進み出てくる。2人が指揮者の両隣りに来た時、曲はテンポを落とし雅やかに展開する。小川が低音の歌声を響かせ、Wakanaが歌い継ぐ。向き合いながら彼女たちがハーモニーを重ねるのは、グスターヴ・ホルストの管弦楽組曲「惑星」の第4曲から「Jupiter」。吉元由美が詞をつけ平原綾香がヒットさせた1曲である。フルオーケストラと2人の歌姫の共演によるこの曲は華やかで、第1部での楽しみの延長線上へと誘ってくれる。

「出会って何年になりますかね?」と歌い終わったWakanaが言う。「12年になります」と小川。その頃の小川は小学生で、「天使のような子が美しい声で歌っていたので眩しくて見れなかった」というエピソードを明かすWakana。小川がかつて舞台で1度だけフルオーケストラで歌ったことがあるという体験を話してから、2人はローマ・イタリア管弦楽団の方々が楽屋ではフランク

Rehearsal Photo

本番のドレスを着用して通しリハ。広いスタジオです!

気になる部分をひとつずつ確認しながら進めていきます

白いドレスもフィッティング。本番と同じように歌います

オーケストラと合わせることができるリハーサルは数えるほど

本番当日。1階客席から、パイプオルガンを狙うWakanaカメラ

で一緒に写真を撮った、など共に音を合わせる人の人間性に触れる。そうやってまたひとつ心の距離が縮まった瞬間が訪れ、届けられたのは梶浦由記が田中理恵に提供した「水の証」。豊かさを感じさせるWakanaとクリアな小川、2人の味わいが異なる澄んだ歌声のリレーとふくよかな演奏が、すべてを飲み込んでいく。その響きには大きさと深さ、生命力があった。

小川を送り出した後、淡い光がWakanaを照らす。「灯影」を奏でる弦楽器の波にゆったりとたゆたう彼女の歌は声量たっぷりで、切々と胸を締めつける。続く「夏の朝」は、男女混声のコーラスとWakanaの歌のみで始まり、ハッとさせられる。ハープとピアノ、少ない音の鳴りでワンコーラスを歌った「明日の景色」。独りの心で巡っていたその歌は、幾重にも楽器が重なり、音楽に厚みが増す中で昇華されていく。ふくよかな中音から高音への抜けの淀みなさ、表現力の豊かさ、存在感……Wakanaが纏うソリストの魅力に息を飲む。その魅力の源流を強く感じられたのは「I have a dream」だった。ゆったりとした演奏に乗って、柔らかな声で丁寧に曲を紡いでいく歌。出会いがあり別れがあり、季節が巡っていく、普通の日常とそこで抱く小さな夢が感じられる。自由に自分らしく小さな夢を大切に明日へと運ぶ彼女の人間性が、歌に宿っている。それは奏でる各楽器の音色もそうで、歌い手、演奏者の人柄や想いが入っているからこそ、聴き手は心を動かされるんだ、と思えた。そしてWakanaはこうして1曲を通して歌うことで、より個人的な想いを乗せられたのだろう。それはまた違う命を曲に吹き込むことになっている。

こうしてソロとしての表現で浮き彫りになっていく新しさはKalafinaでデビューしてからのすべての時間、経験が生んでいるものでもある。梶浦由記が楽曲に託した想いを、自身の心を重ねることで受け継ぎ、音楽や制作で教えてもらったこと、3人で歌い感じてきたことも、Wakanaは持ち続けている。

この公演でWakanaはイヤーモニターを付けずに歌っている。指揮者よりも少し観客寄りに立ちながら彼女はタクトの動きを感じ、共に奏でる演奏者の音と呼吸を感じてメロディを紡ぐ。視野の広さと、共に音を重ねる人の呼吸を読むスキル、これもまた培ってきたもののひとつだ。

ライブは「believe」で一気にテンポを上げる。そして、FictionJunction Wakana名義でオリジナルを歌った「光の行方」。狂気を孕みながらダイナミックに展開するオーケストラの演奏の只中で、彼女の歌の旋律は一筋の汚れない光のように、揺るぐことなく在り続けた。その光は「夢の大地」で開けた世界に出る。雄大な音の重なりと、肩幅より少し広いスタンスで立ち、体を左右に揺らしながら歌うWakana。彼女の声は力強く根を張り、空へと伸びていく命の塊を思わせる。曲のラスト、一気にクレッシェンドしたオーケストラと歌の残響を受け、観客は心の高まりを拍手で表わす。消えることのない拍手を受け、晴れやかな笑顔でWakanaはぐるりと会場を1度、2度と見渡しながら応える。彼女の唇は「ありがとうございます」と湧き上がる想いを伝えていた。

「最後の曲です、聴いてください」

一言を挟んで始まった本編を締める「むすんでひらく」。照明が煌々とステージを照らす。Wakanaが上手、下手へと優々と歩みながら歌う。奏でられる音は瑞々しく、爽やかで幸福に満ちている。"君がくれたもの"を全部乗せたまま先へゆくよ、という想いが深く沁みてきた。

アンコール、鳴り止まない拍手に最初に応えたのは龍だ。光沢のある淡いピンクのドレスで現われ、自身の宝塚退団公演のために書き下ろされた「Memory LOVE」を披露する。そして龍と入れ替わり、再び登場したWakanaは応援してくれる人たちにプレゼントを用意していた。それは、初めて作詞した楽曲「時を越える夜に」だ。初披露となるミディアムスローのこの曲は、何度も会えるよね、と永遠を願う想いが溢れる歌だった。

*

ステージには、今夜音を奏でたすべての人が一列に並んで、惜しみなく贈られる拍手に応えている。その中央に立つWakanaは充実した微笑みを浮かべていた。彼女はこれまで得たもの、出会った人、さらには今夜得た手応えとありがとうを抱えて、自分の道へと踏みだそうとしている。そう感じた。

Wakana interview

この号が皆さんのお手元に届くのは、ちょうど初めてのソロツアーが終わった頃。
今回のインタビューでは、ちょっと時計を巻き戻して、Wakanaが初めてひとりでシンフォニーコンサートのステージに立ったあの日に感じたこと、そしてソロツアーが始まる直前の気持ちを紐解きます。

Photo ⇒ 能美潤一郎

The current condition interview

◆このインタビューを行なっているのは、9月中旬で。ちょうどソロツアーのリハーサルや打ち合わせが始まっている頃でしょうか?

「そうですね。ただ本当に、私はもちろんですが、周りのスタッフさんも含めてソロツアーに関しては初めてのことだらけで……。すべてのことが初挑戦でわからないことだらけです。まずは踏み出して、自分で経験していかないとなと思っていて。今は"なにがわからないのか、わからない"という状態に近いですね(笑)」

◆ソロツアーとなると、やっぱり違いますか?

「3人で歌っていた時は、梶浦さんが音楽を作ってくださって、その世界をハーモニーと歌で表現するのがKalafinaの役割でしたし。まずKalafinaという存在が一人歩きしてイメージを確立していって、その後に私達がデビューしたという感じだったんですね。そのイメージに私達3人が追い付いていった、という感覚が強くて。常に、まず先にKalafinaがあった。ずっとKalafinaを追いかけている部分もあったのかなって思うんです。それは課題であり、やり甲斐であり、道しるべだった。でもひとりで歌う時に、そのイメージがそのままWakanaになる、というわけにもいかなくて。でも、みんなが心の中で思ってくれているイメージを壊したくはないんです。その上で、Wakanaとして一歩を踏み出すにはどういう道を行くのがいいんだろう?と模索している最中です」

◆ご自分で作詞されているとおっしゃっていましたよね。

「3〜4月ごろから作詞に挑戦しています。音楽に歌詞を乗せるのは本当に初めてのことだったので、なかなか納得いくものが書けないんです。この5音のフレーズに乗せる5文字のベストチョイスはなんだろう?って。たとえば、"♪愛してる"と思いついたとしても、本当にその言葉をここで歌うことが、この楽曲にとって一番いいのか?っていう。もっと他にあるんじゃないのかな?って思ってしまってなかなか書き終われない」

◆これまではいただいた楽曲を歌唱で表現することが一番大事で。歌詞を書くとなると、自分でこの世にゼロから1を生み出すっていうことですから……。すでにある世界を広げたり、深く掘り下げたり、解釈していくのとはまた別の次元の難しさがあると思います。

「私がなにを届けたいのか、という想いをちゃんと言葉に落としこんでいきたいなって思います。ソロ曲としていただいている楽曲がどれも素晴らしいので、その魅力を損なわないように、これから少しずつでも楽曲という形にしていきたいですね」

◆ソロツアーでは、Wakanaさん作詞の楽曲も何曲か聴くことができるんでしょうか?

「その予定でスタッフの皆さんと絶賛練っているところです。8月に開催したシンフォニーコンサートの最後に、自分で作詞した"時を越える夜に"という曲を披露させていただいたんですけれど、終演後のアンケートで、ファンの方から"他の曲も聴いてみたいです"というメッセージをいただけて。それが励みになっています。8月のコンサートでKalafinaの楽曲を歌唱したことで、私のこれまでの経験や積み重ねてきたことがここにあるんだ、というのは自分にも皆さんにも見せることができたように思っていて。そこでゴールを迎えるのではなく、ソロツアーでは、"Wakana"というパーソナルな部分と"Kalafina"がクロスオーバーしていく内容になるんじゃないかな?とは予感しています」

*

◆では、ちょっと時間をさかのぼってもらって、さきほどお話に出てきたシンフォニーコンサートについても聞かせてください。

「もうね! 本当に緊張しましたよ〜!! オーケストラとの競演は私自身の夢でもありましたし、観に来てくださる皆さんにとっても楽しみな要素だと思っていたので、頑張らなきゃ!という気持ちがあったんですけど、想像以上に緊張しました(笑)」

◆外国の交響楽団の方達はどんな感じだったんですか?

「皆さんとても優しくて気さくな方達で。指

揮者の方も"歌いやすいように演奏するから、もっとリクエストしてくれていいよ"という感じで、歩み寄ってくださって。本当に助けていただきました。ひとりでオーケストラと一緒に歌う、というのは初めてのことで、難しいこともたくさんあったんですけれど、歌を第一に考えて演奏してくださるので、まずは自分の思うテンポ感というものをちゃんと確立しないといけないんだな、というのは強く感じました。今までのバンドスタイルでは同期が走っている曲も多いですから、4分半なら4分半できっちり終わる音楽を歌っていたけど、オーケストラと一緒に奏でる、というのはそういうことではないんだなっていうのを実感しました」

◆すべての音が、生身の人間によってその場で奏でられている音ですもんね。電子機械はそこに介在してないというか……。

「私のフットモニターとマイクくらいですよね、電気が通ってるの(笑)」

◆そういえば、途中のMCでも言ってましたけど、あの日はイヤモニをしてなかったんですよね。

「そうなんですよ。リハで徐々に外していって、本番でも外せるかしら?と思ってやってみたら外したまま歌えたので、じゃあイヤモニなしで生音を聴いて歌おう、と思って」

◆生のほうが歌いやすかったですか?

「気持ちよく歌えました。全部の音を聴こうと思えば聴けるじゃないですか。イヤモニをしていると、耳の中が音であふれてしまって、本当に鳴っているバランスがわからなかったりするんですね。自分の声自体も、耳の中で鳴っている音に合わせてしまうから制限されてしまうところもあって。今回はオーケストラだから、生音が可能だったんです。ドラムが入ってくる通常のバンド編成だとステージでの聞こえ方が全然違うので、イヤモニなしだと無理なんですけどね」

◆クラシックホールとはいえ、あれだけの数の楽器が鳴っていると難しいように思いますが……。

「指揮者の方もいらっしゃいますし、ピアノの音を感じて身を委ねていけば大丈夫でした。ただ、"明日の景色"の1番の伴奏がハープのアルペジオだけなんですけど、そこはものすごく難しかったです! 内心ものすごく焦ってました。そこから続く"I have a dream"も難易度高かったなぁ。この2曲は、リハでも念入りに練習しました」

◆そうだったんですね。

「大変でしたけど、なにもかも楽しかったですよ。全部が人力だから、歌を止める部分、溜めの時間、入るタイミングは、自分で決めて歌っていたんですが、そういうちょっとしたところを自分でコントロールできるのが新鮮でした。Kalafinaの武道館で"ひかりふる"を同じようにフリーで歌う箇所があったんですけど、それはやっぱり3人でひとつのテンポじゃないと意味がないんですよ。自分だけのテンポで歌うとハーモニーが合わなくなってしまうから」

◆ちなみに、一番最初にステージに登場した時、めっちゃ緊張してました?

「めっちゃくちゃ緊張してた(笑)。あの日の私の心労、実はすごかったみたいで。コンサートの日の夜、マネージャーさんと2人でご飯を食べに行ったんですよ。ステーキとかもうここぞとばかりにがっつり食べて、お酒もたくさん飲んで(笑)。もう食べられない~っていうくらいお腹いっぱいに食べたのに、翌日体重も体脂肪もびっくりするくらい落ちてて。1ステージ……といってもフルじゃない尺ですけれど……それでもひとりでステージをこなすって、相当なエネルギーを消費するんだな、と。びっくりしました(笑)」

◆これまで経験したことのないプレッシャーだったんでしょう。

「本番でステージに出る直前まで、いろんな方がお声がけしてくださったんですけど、心ここにあらずでしたね(苦笑)。ステージに立っていると、お客さんがなにかを言っているように聞こえてくるんですよ(笑)。そんなわけないのに! 緊張しすぎて幻聴めいたものが聞こえてきたんでしょうね」

◆1部の冒頭は、Wakanaさんもお客さんもちょっと緊張しているような空気でした。

「もうね、1部最後の曲を歌い終わって、龍さんにバトンタッチした時の安心感はすごかった~!(笑)」

◆2部は小川真奈さんがゲストヴォーカリストとして登場されて、一緒に歌っていましたね。

「真奈ちゃんがいてくれて、とても助かりました。一緒に歌うことで、1部の私だけの歌とは違う味わいになるし、私自身の異様な緊張もほぐれてきて(笑)。セットリスト的にも、ホルストの"木星"と平原綾香さん

Kalafinaの楽曲を歌唱したことで、私のこれまでの経験や積み重ねてきたことがここにあるんだ、
というのは自分にも皆さんにも見せることができたように思っていて。
ゴールを迎えるのではなく、ソロツアーでは、"Wakana"というパーソナルな部分と
"Kalafina"がクロスオーバーしていく内容になるんじゃないかな?とは予感しています

の"ジュピター"を流れで聴かせる、という今回ならではの魅せ方ができて、とてもよかったんじゃないかなって思いました。私自身、オーケストラの演奏が聴けて嬉しかったです」

◆このコンサートで初めてKalafinaの楽曲に触れて、Wakanaさんの歌声を聴いた方達もたくさんいらっしゃったと思いますが、Kalafinaの音楽の素晴らしさはしっかり伝わったと思います。

「だと嬉しいんですけど……ただ、終わってから思ったんですけど、もっと自分が歌う曲や一緒に出演する方達について、いろいろお話するべきだったな、って。緊張しすぎていて、MCで思ったようにしゃべれなくて……そこは反省しましたね」

◆歌うだけじゃなくてMCで進行していくのもひとり、ってことですしね。歌唱の面では、ひとりで歌ってみて改めて感じたことはありましたか?

「緊張はしていたんですけれど、歌という部分だけで考えると、今までいちばん力まずにしゃべるように歌えました。自分でもびっくりするくらい、声が出る〜!って思って歌ってましたね(笑)」

◆ファルセットもミックスも高いキーまで伸びやかに出ていました。

「こんなふうに歌えたのは初めてだったんですけど、それはやっぱりひとりで歌っているからだと思います。3人で歌う場合は、もっとひとりひとりがパワーを出さないと成立しないんです。最初、オーケストラの演奏と歌う、ということで、私の声が保たないんじゃないか、とスタッフの皆さんが心配されていたんですね。コーラスの比重を大きくしましょうか、とか、私がコーラスパートを歌って、主メロをコーラス隊が歌うとか。私のノドや声のことを考えて、そういうアレンジを作ってくださったりもしたんですけど、前日のリハで全部アレンジを変更してもらって、すべての主旋律を自分で歌うことにしたんです。いただいたアレンジで一番歌う部分が少なかった"むすんでひらく"も歌詞のすべてを伝えたかったら、全部歌うように変えたり。全14曲という少ない曲数だったからかもしれないんですけど、すべての曲で思ったように声が出せたんです。すごく不思議な体験でした。こうやって歌っていいんだ!って見えてくるようで……」

◆それは、3人で歌っている時は無理をしていた、ということではないんですよね。

「そうですそうです! 3人には3人のベストの歌い方があるんです。ひとりで歌う時の、新しい自分の歌い方、新しい声を知ることができた、というか」

◆中音域〜低音域の深みのある感じとか新鮮でしたし、とてもよかったです。

「"I have a dream"の、ハイトーンで伸ばしたあとに、♪時は行く〜って低音部のフレーズに入るところ。歌っていて、なんて気持ちいい曲なんだろう、人が声を出して歌う時の気持ち良さがある曲なんだなぁって改めて感じましたね」

◆アンコールでは、先ほどお話に出た「時を越える夜に」を初披露されて。

「まさか初お披露目がオーケストラとは(笑)。この曲は、スウェーデンの作曲家さんと日本の作曲家の周水(Shusui)さんの共作なんです。だからちょっと洋楽の匂いがあって。オーケストラと一緒に歌えたのはとても嬉しかったです。歌詞も本当はもっと直したい!とかいろいろあったんですけど(笑)」

◆え、そうなんですか!

「そうなんです(笑)。だって生まれたてホヤホヤの状態の、レコーディングもしてない曲なんですよ〜。自分の書いた歌詞を歌うっていうのは初めてのことで、すごく恥ずかしかったんですけど、オーケストラの皆さんの演奏に助けられました」

◆歌詞も素敵でした。聴く人によってさまざまな受け取り方できる、いろんな風景が浮かびそうな曲だな、と思いました。

「とにかく歌詞を間違えないように、ってすごく緊張していました(笑)。まだ誰も知らない曲なんだけど(笑)。そして、近いうちに完成させた状態で皆さんにお届けしたいですね」

◆楽しみにしています! もちろん新たな曲を聴けることも。

「3月にKalafina3人でのライブがあって、10周年を追いかけたドキュメンタリー映画が公開されて、舞台挨拶があって……あれから約半年。今がちょうど境目だと思っています。これからはどんどん私の新しい部分を出せるように頑張っていきたいと思っています」

第5回

Wakanaと行く！サメ捕獲の旅！

～Wakana「MEG ザ・モンスター」を観る編～

今回のこのコーナーは、サメ映画、
しかもWakanaの大好きな
太古のサメ「メガロドン」の映画
『MEG ザ・モンスター』がちょうど公開中、
これは観に行くしかない！
ということで映画館に行ってきました！

なかなか迫力のあるポスターです……怖いのかな……

東宝シネマズ六本木の中の綺麗なトンネル！

映画の雰囲気をお伝えするため、絵に挑戦！

東京タワーを撮影中

◆「MEG ザ・モンスター」を観に行って来ました! いかがでしたか?

「まず、MX4Dが初めてだったんですよ! だからこの映画は絶対MX4Dで観たいと思ってお願いしたんですけど。大正解でした! この映画はMX4Dで見るべき! すっごく面白かった!」

◆迫力がすごかったですね!

「想像以上に座席が動く! 初めての人は心配だと思うんですけど、ジェットコースターが苦手な私でも大丈夫でした。最初はびっくりしたけど楽しかったです。風とか水も出たり!」

◆ワイワイ楽しく観ることができました。

「そう。普通の映画館よりも大袈裟に笑ったりできます。びっくりして自然に声が出ちゃいます! 何がすごかったって、メガロドンのことをこんなにもたくさんの人が観てくれている、っていうのが嬉しかった!」

◆「メガロドンを観に来てくれてありがとう」っていう気持ちなんですね(笑)。

「メガロドンとは……太古のサメで体長25メートル～27メートル。200万年前に絶滅した……っていうセリフとかも、うんうん知ってる、そうなのよね～っていう思いで観てたんで」

◆たぶんあの映画館でそう思って観てた人、ほかにいないですよ(笑)。

「いや、もうそれくらい好きなんで。今まで、好きなサメは何ですか?っていう質問にも"メガロドンです"ってずーっと答えてたし。"太古のサメで恐竜と同じ時代に生きてたんです"ってずっと言ってきたから。本当に嬉しくて」

◆やっと世に出たか、と。

「これでみんなが、"メガロドンってあれね"ってわかってくれたのが嬉しいです。メガロドンは人間の想像を超える大きさで本当に驚くべき存在、ってことをこの映画で伝えてくれたことがもう本当にありがとうっていう感じで。やっと世に出たな、と」

◆完全にメガロドンの気持ちですね(笑)。

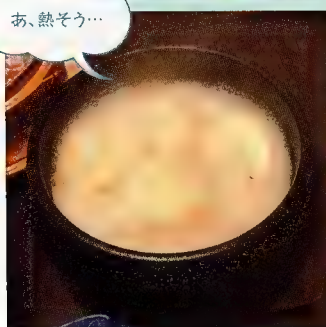
「でもそれでも映画で観るだけでは"ああ～"くらいだと思うんだけど、実際本当にあんな大きいメガロドンが海にいると思ったら怖くないですか!? それがロマンなんですよ!! あと……"メガロドン"の英語の発音を聞くことができて感動しました♡」

◆これを読んでいる方にもWakanaさんのメガロドンへの想いが伝わったと思います!

「映画なので詳しい内容までお話できないのですが……気になった方はぜひ観てみてくださいね!」

おまけ 「Wakana餃子を食べ歩きの旅」 第2回

恒例となって参りました餃子プチコーナー。今回も食べてきました!

まずは黒豚小籠包をいただきます!

次に店名にもなっている餃包(ぎょうばお)をいただきます! 少しずつ食べないと大やけどします。店員さんは5日治らなかったそう……

〆に台湾まぜそばもいただきました!

Wakanaの美味しそうな表情をご覧いただけましたでしょうか(笑)。お近くに行った際にはぜひ食べてみてください!

●今回餃子を食べに訪れたのは東京・六本木にある「肉汁水餃子 餃包」さんです。

Wakanaが描いた「MEG ザ・モンスター」のイラストを1名様にプレゼントいたします!

【応募方法】

Harmonyサイトにログインしていただき、トップページの「Wakanaと行く! サメ捕獲の旅! イラストプレゼント」バナーよりご応募ください。

応募締切:11月30日(金)まで

Wakana's Photo

Wakanaの『店内の植物ベスト3』

1st

P.talnadge
店内にドーンと構えていた存在感のある植物を見て「これ絶対に1位」とWakana。店員さんに名前など説明をしていただき、真剣に聞いていました

2nd

パキラ
大きい木! 下から見上げる高さです

3rd

スペルシア
カリナータ ソイソン
垂れ下がる植物が好きなんです! ということでこちらが3位!

◆植物に興味を持ったきっかけは何だったんですか?

「植物を育て始めたのはまだ最近で、2年目くらいです。でもそれまでも木々が近くにあることが好きでした。前に住んでた家の窓から街路樹や公園の木がすごく見えたんですけど、引っ越したらそれがなくなってしまって、緑が見えなくなる! 緑を家の中に入れないと!と思って(笑)」

◆初めて育てた植物は何ですか?

「最初は知り合いの植物屋さんに行って何をどう育てたらいいか教えてもらって、まずはエバーフレッシュとシェフレラを育て始めました。そこからどんどん増えていきましたね。植物屋さんだけじゃなくて自分で探してみるのも面白くなってきて。例えばショッピングをしている時に、家具屋さんにも植物って売ってたりするんですよ。洋服だと1ヵ月とか1シーズンごとに商品が変わるけど、植物は回転が速くて1週間くらいでなくなってしまったりするので。今では休日はだいたい植物を見に行ってます」

◆なるほど。いろんなところで植物を探すのは楽しそうですね!

「今では、"あっ! この子キレイ!"とか"美人!"とかわかります。この子は健康的だな、とか見た目でわかるようになりました。植物は声も出せないし動けないし、すべてはフォルムなので、ビジュアルのいい子を見かけるとキレイと思って買っちゃいます。ビジュアル重視の厳しい世界です(笑)」

◆(笑)。これから買う方にアドバイスはありますか?

「買う前に、家の中のどこに置こうかな、と考えるのも大事ですね。私はお店で見て、家に帰って、ここなら置けるなと思ったらまた買いに行ったりします!」

Wakanaコメント

最高でした! こんなステキなお店があるなんて♡ とにかく種類が豊富! 大きな木から小さな多肉植物まで何でもあります。そして植物を入れる鉢や、水受け、レンガ等……とにかくなんでも揃います!! 素晴らしいです♡ 朝からの撮影にも快く応じてくださったお店の方々に、本当に感謝です! そして朝のお店のオープンから植物を見に来るお客さんがいて、「私ももっとここに居たい……」と心底思いました。絶対また行きます♡ プロトリーフ ガーデンアイランド玉川店さん、本当にありがとうございました!

撮影協力

プロトリーフ ガーデンアイランド玉川店
〒158-0095
東京都世田谷区瀬田2-32-14
玉川高島屋S・C ガーデンアイランド2F
TEL:03-5716-8787
営業時間:月曜～日曜:10:00a.m.～8:00p.m.
(1/1、元旦のみ休館)

プレゼント!!

Wakanaが自宅用にお迎えした「ベンジャミン ラブリー」のラブちゃんのイラストを、1名様にプレゼントいたします!
【応募方法】
Harmonyサイトにログインしていただき、トップページの「Wakanaの"グリーンに囲まれ隊"イラストプレゼント」バナーよりご応募ください。
応募締切:11月30日(金)まで

Hikaru

“Hikaru” Birthday EVENT 2018

2018.07.31(tue)

東京 サントリーホール ブルーローズ (小ホール)

Kalafinaの“Hikaru”がデビューを飾ったのは、2008年7月30日に発売されたシングル「ARIA/sprinter」。
そして、Hikaru本人の誕生日も7月2日。ダブルの意味で記念すべき“Birthday”を迎えたHikaruを
みんなでお祝いするためにファンクラブイベント『“Hikaru” Birthday EVENT 2018』が開催されました。
“らしさ”あふれる、フレンドリーかつディープなイベントの模様をお届けします。

Photo ⇒ キセキミチコ (KISEKI inck)

開演時間になり、カフェミュージックのようなオシャレな音楽が流れ始めた。ふとステージを見るとスクリーンにファンから寄せられたQuestionとそれに対するHikaruのAnswerが映し出されている。ゲームでの推しキャラは？　お気に入りのコスメは？　好きなお酒は？等のいろんなQ&A、そしてその合間に、Hikaruの幼少時代の写真が数枚紹介されるというサプライズ！　目を離すスキを与えない演出にみんながスクリーンを凝視していると、舞台袖からHikaruがす～っと登場してスツールに腰掛ける。ゆるく巻かれた髪の毛がふわっと肩のあたりで揺れるのがかわいくもあり、ちょっと大人っぽくもある。そして、満員御礼の客席を見回しながら、「すごく緊張しています！　今日は肩肘張らずにやろうと思っているので！」と宣言。客席から「頑張ってー！」と声援が飛ぶ。「皆さん、どんどん声出して！」と懸命に呼びかけるHikaruのチャーミングな様子にどっと笑い声が上がり、場内の空気が温まってきた。

「では、時間がないからツメツメでいきますね」と、質問コーナーがスタート。そして「今まで作ったプロデュースグッズの中でお気に入りは？」という質問をきっかけに、恒例のHikaruのグッズ紹介コーナーへ。待ってました！の大歓声の中、今回のイベント用に制作したTシャツ、ミニタオル、チケットファイル、キャップ、クリアファイル&ブックレットセットを、推しポイントを織り交ぜながら次々と説明。冴え渡るグッズトークに、聞いているみんなも満足そうだ。

続いて、「これは家でひとりでやるやつですよ～」と照れくさそうにボヤきつつも、リクエストがとても多かった「好きなマンガやアニメについて語ってほしい」「朗読をしてほしい」「演劇をしてほしい」というお題をミックスした「Hikaruの好きなマンガのセリフを朗読し、その作品について語るコーナー」へ。1作目は『×××HOLiC』（CLAMP）、2作目は『マコとアキちゃんの恋心』（目黒あむ）、3作目は『天使なんかじゃない』（矢沢あい）からそれぞれ好きなシーンをセレクトしたHikaruは、「やるからには全力でやります」と前号のインタビューでも言っていた通り、そのシーンを鮮やかに朗読してみせてくれた。自ら選んだ3つのセリフを通して、「信念を貫く生き方」「飽くなき向上心と覚悟」「あふれんばかりの感謝の気持ち」という彼女自身の想いを、しっかりと私達に伝えてくれたのだった。

熱演のあとは、全員参加型『ジャンケン大会』を開催。前コーナーで紹介したマンガを勝者にプレゼントするという、Hikaruが自腹を切った太っ腹な企画だ。勝ち抜き戦と負け抜き戦という真逆の2パターンを行ない、場内は大いに盛り上がった。

「いっぱいしゃべったので、そろそろ歌いたいと思います」というHikaruの言葉をきっかけにピアノ・櫻田泰啓が登場。もちろんここから披露される楽曲も、ファンからのリクエストを軸に構成されたセットリストだ。

「オーディションの時を思い出してドキドキします」と緊張の面持ちで歌った1曲目は「宝石」。しっとりとしたピアノの音色と抑制の効いたHikaruの歌声が、静かな熱を帯びて絡み合う。余韻を味わうようにじわりと広がった拍手に包まれながら、「緊張して手が震えるよ～」とちょっぴり笑いを誘うと、「次はアニソンを。カラオケでよく歌う曲です」と坂本真綾の「プラチナ」を披露。オリジナルに比べてスローテンポで始まると、大きな翼をゆるやかに羽ばたかせるように広がっていくHikaruの歌声と穏やかなピアノの音色がホールいっぱいに満ちていく。こんな表情も持った楽曲だったんだ、と目の醒めるような気持ちだ。続けて流れるように始まったのは中森明菜の「北ウイング」。ムーディーなジャズアレンジに乗せて低～中音域を響かせるスローな歌声が新鮮。クセになりそうな大人な雰囲気に酔いしれていると、櫻田がグリッサンドでウェットな空気を鮮やかに切り裂いて、ドラマティック&スウィンギングな「CAT'S EYE」がスタート。ライティングで赤く染まるステージを上手～下手とたゆたいながら、ミステリアスに

リハーサル中のHikaru。歌が始まるとスッと世界に入りこみます

櫻田さんとの息ぴったり! ジャズバーのような雰囲気にうっとり♪

練習しながら、細かい変更点や自分が気になる部分を譜面に記入

いろんな準備に追われて大変そうでしたが、休憩中はこの笑顔♡

イベント全体の流れやライブコーナーの照明などをスタッフと相談

歌い上げる。その情熱的な歌唱に呼応するように大歓声が湧き起こった。

その盛り上がりを受け止めながら、「次は大切な曲を歌います」とHikaru。「最初にKalafinaとしてレコーディングした曲です」「10年間やってきたからこそ歌える"ARIA"をお届けしたいと思います」

そんな言葉から始まった「ARIA」。Hikaruの発する言葉がキラリと煌めきながら、一言一言、心に降り積もってくる。祈りのような、嘆きのような2番の歌唱が、聴く人の心の中にいろんな風景を連れてきたのではないだろうか。そっと涙をぬぐう人の姿もあった。

「本当にその時の気持ちが直に反映されてしまう曲です」

と、Hikaru自身もこみあげてきたものがあったようで、瞳を潤ませていた。

「次は洋楽をやります」というHikaruのやわらかな声で場の空気がふっと緩む。まずはThe Beatlesの「Blackbird」を流暢な英語で歌い紡ぐ。ウィスパーな歌声が、張り詰めていた心の糸をほぐしてくれるのを感じる。続けてビリー・ジョエルの名曲「Honesty」と「Just The Way You Are」を披露。ひだまりのようなやわらかなライトの中で情感豊かに歌い上げるHikaruの姿からは、"誠実に""ありのままで"生きていきたい、という言葉にできない想いがにじみ出ていたように思う。

そんな穏やかな雰囲気を一転させたのは、超有名アニソンナンバー、高橋洋子の「魂のルフラン」だった。Kalafinaでの歌声ではあまり聴くことのない、体の奥深くから響かせるソウルフルな歌声に圧倒される。自分が好きなのでマイリクエスト曲として歌ったという「History Maker」では、オリジナルよりも雄々しく、頂点への階段を駆け上がっていく躍動感にあふれた歌声を聴かせてくれた。情熱が収まりきらない!とでもいうような生命力に満ちた歌声に、こちらの心拍数がぐんぐんと上昇してしまいそうだ。

「次で最後の曲になります」という言葉にどよめく場内。「リクエストを募集したらダントツで1位と2位だったのが"sprinter"と"ARIA"でした」と告げ、「最後は"sprinter"を歌いたいと思います。初期の頃はずっと歌っていたし、ここ何年かはライブの要の場所で歌わせてもらっていた曲。今日の想いを込めて歌います」と、静かな決意を湛えた瞳で中空を見つめる。"君と出会い 叶わぬ夢を見た"──1音1音に、万感の想いが込められたHikaruの歌声に胸がグッと熱くなる。今日しか歌えない、今日だからこそ歌えた「sprinter」。"I'm calling your name"……歌声の美しい余韻を残したまま、ピアノがゆっくりと終着への旋律を奏でる。最後の和音の残響が消えるか消えないかの瞬間に、雪崩れるように割れんばかりの拍手が沸き起こった。

なかなか鳴り止まない拍手を浴びながら、「最後は皆さんをお見送りをします! じゃあまた後ほど!」と笑顔で大きく手を振りながらステージを降りていくHikaru。ロビーに立って、名残惜しそうにホールを去っていく観客ひとりひとりに手書きのメッセージとサインを入れたポストカードを手渡していた。時間にすれば十数秒かもしれないけれど、目と目を合わせて、直に言葉と愛情と感謝を交わし合った瞬間の想いは、今日のスペシャルなバースデーイベントの思い出と共に、いつまでも心の深いところで息づいているに違いない。

"Hikaru"
Birthday EVENT 2018
2018.07.31(tue)
東京 サントリーホール ブルーローズ(小ホール)

01. 宝石／井上麻里奈 Cover(梶浦由記 作詞・作曲)
02. プラチナ／坂本真綾 Cover
03. 北ウイング／中森明菜 Cover
04. CAT'S EYE／杏里Cover
05. ARIA／Kalafina
06. Blackbird／The Beatles Cover
07. Honesty／Billy Joel Cover
08. Just The Way You Are／Billy Joel Cover
09. 魂のルフラン／高橋洋子 Cover
10. History Maker／DEAN FUJIOKA Cover
11. sprinter／Kalafina

Hikaru interview

7月31日に開催した初のソロイベント「"Hikaru" Birthday EVENT 2018」。初めての挑戦を無事終えたHikaruに、今の素直な気持ちを語ってもらいました。ファンの皆さんの愛あるリクエストに全力で応え、感謝の気持ちを手渡しする中で、改めてHikaruの胸に去来した想いとは……。

Pnoto ⇒ キセキミチコ (K SEKI inck)

The current condition interview

◆今日はバースデーイベントを終えての感想をメインにお話いただければと思います。Hikaruさんにしかできない、楽しいイベントになりましたね。まさかオープニングムービーの後に普通にゆる〜っと登場して、すぐにしゃべり始めるとは思ってなかったです（笑）。

「"今日はありがとうございます〜"ってご挨拶したあと、椅子に座ってしゃべりだすっていうね（笑）。Hikaruが頑張りすぎちゃってもお客さんが緊張しちゃうなって思ったので、あんまりそれを感じさせないようにトークコーナーから始めました。オープニングムービーでは、みんなの質問の中から一問一答でサクっと答えられそうなものをスライドで流してもらって、合間にちょこちょこと昔のHikaruの写真を挟み込みつつ」

◆皆さん、ざわついてました（笑）。

「Hikaruもざわついてました（笑）。今までどこにも出したことのない、こんな写真を見せたところで喜んでもらえるものなの!?って」

◆大丈夫です!

「だといいんですけど……。寄せられた質問もちょっとカジュアルめなものが多かったですね。推しキャラはどれですか?とか好きな食べ物はなんですか?とか。まずはサクッと答えられるものをオープニングっぽく選びました」

◆そのあと、トークコーナーでは、待ちに待ったグッズ紹介が復活しました。

「10thアニバーサリーの時はやらなかったから、久々でしたね（笑）。昼の部の皆さんはテンションが柔らかい感じだったんですけど、夜の部は皆さんはシックな雰囲気で（笑）。若干、Hikaruの緊張が増しましたね」

◆昼と夜で違ったんですか?

「不思議なことに。太陽が出ている時と夜とではなんとなくお客さまの心持ちも違うのかもなぁっていう発見がありました。サントリーホールという場所柄もあったのかも。グッズ紹介コーナーを楽しんでいただけたからなのか、たくさんの方達がグッズを手に取ってくださいまして!　ソールドアウト続出の嬉しい悲鳴となりました。ありがたい〜!」

◆後々、通販で販売したほどの反響でしたから。そして、その次はお待ちかねの……。

「家でやるやつ（笑）」

◆好きなマンガのシーンをHikaruちゃんが声で演じて、そのマンガを紹介する、という、Hikaruスペシャルコーナーですね。ファンの皆さんからのリクエストがとても多かったんです。

「やるからには全力で取り組みました!　今まで読んできた作品を振り返って選びました。作品を選んでから、改めて読み直してシーンを厳選したんですけど、当時は意外と気にしていなかったセリフが今読んだら刺さるとか、そういう現象があっておもしろかったです。『天使なんかじゃない』は高校生ぐらいの時に読んだこともあって、大人

イベントの内容を練ったり、ライブの練習をする準備期間が、
自分の人生を振り返るような時間でもあって。自分にとっても大事なイベントだったなって思います
ひとりでステージに立つというのは、今まで感じたことのない気持ちがありましたね

になってから読むと、よりいっそう深く感じられるところがあったりして。あぁ、高校時代から15年間をけっこうちゃんと生きてきたんだなぁと感じました(笑)」
◆皆さんすごく真剣に聴き入ってました。
「そうですよね、すごく真面目に聞いてくれていて。"どんな話なんだろう?""なんで好きなんだろう?"っていうのをきちんと受け取ってくれてるな、って話しながら感じていました。BGMはその作品に関する音楽を流してもらったんですよ(笑)。"天ない"を紹介した時のBGMは"スタンド・バイ・ミー"。お話の中で、高校の後夜祭で、ヒロインとヒーローがこの曲に合わせて生徒会室で踊るっていう素敵なシーンで流れている曲なんです」
◆とても良いコーナーだったと思うのですが、実際にやってみてどうでした?
「緊張しました! もっとゆっくり読もうと思ってたんですけど、めっちゃ早口になっちゃいましたね(笑)。緊張は人を早口にするね! ホントに恥ずかしすぎました。なかなかの精神修行だ!と思いました(笑)」
◆次のチャンスは……?
「みんながすごい望んでくれたら……とも思いますけど(笑)。来てくださった方の中には、マンガに全然興味のない方もいらっしゃったと思うんですけど、そういう方がちょっとでもHikaruの好きなマンガに興味を持ってくれたらいいな、と思います」
◆そして全員参加型のジャンケン大会! Hikaruちゃんは相変わらずめちゃ強かったですね(笑)。
「一発目の勝負からみんなけっこう負けてましたよね(笑)。夜の部はタイから来てくれた方が勝ってステージに上がってきてくれて。海外から!?と。嬉しかったですね」
◆あと、逆バージョンの「敗者ジャンケン大会」もありましたね。Hikaruちゃんとのジャンケンに負け続けた人が勝者の「勝ち抜き」ならぬ「負け抜き大会」。画期的なシステムでした(笑)。
「これもファンの方からのリクエストだったんですよ!」
◆そもそもHikaruちゃんが強すぎるから出てきたアイデアかと。
「一日で800人強の人達とジャンケンすることもないので良い記念になりました! 始めま〜すっていう時の、皆さんが"やってやるぞー!"って意気揚々と席から立ち上がる感じ、すごく楽しかったですよね。キタキター!っていう(笑)」
◆全員が一斉に立ち上がるから、取材席で見ていた関係者の私達も全員立って、とりあえずジャンケンしましたもん。負けたけど。
「えー、ありがとうございます!(笑) お客さん全員と一緒に余興的なことをやるっていうのは普通のライブではできないので、こういうイベントならではの風景でしたよね〜。で、ワイワイとほぐれたところでライブコーナーに突入して」
◆ピアノ・櫻田泰啓さんが登場しまして。
「あれだけジャンケン大会で場のテンションが上がったのに、1曲目"宝石"で一気にシリアスな空気にさせるという」
◆瞬間的に空気、変わりました。
「Kalafinaのオーディション曲だったので、ここは始まりの1曲目に持ってこよう、と。オーディションで歌った曲っていう刷り込みがあるから、その緊張を思い出しました。しかもめちゃ難しい!」
◆歌の世界観のせいかもしれませんが、アダルトな雰囲気が素敵な歌声でした。
「今回は全体的に大人なアレンジで挑戦してみたんです。Hikaruも10年の深み、歩みを感じました」
◆自分でも変化を感じていますか?
「自分の中の曲の設定で、主人公が"少女"というのは減ってきていますね。Kalafinaの楽曲の中には、1曲を通して成長や時の流れを感じる曲もあるから、AメロをHikaruが歌う時は"少女"であることが多かったりするんですけど、自分で1曲歌うとなると変わってきたな、と。昔は、真っ直ぐにひとつの答えだけを見て歌ってたというか。若いってことだと思うんですけど。それはそれで成り立ってはいるんですけど、歌詞の考え方や受け取り方が少しずつ変わってきた今だからこそ、深みのある大人なアレンジにしてみたかったんだと思うんです」
◆しっかりと伝わってきました。あと、曲順やブロックごとに個性が出ていて楽しかったです。
「そうなんです! 2ブロック目はHikaruが昔から歌っていたカラオケソングが皆さんからのリクエストに入っていたので、それをセレクトさせていただきました。まさか中森明菜さんの曲をファンの方達の前で歌うことになるとは思ってなかったです(笑)。母親が昔カラオケで歌っていたのを聴いて覚えた曲ですね」
◆ここまでHikaruちゃんの低音をしっかり聴くことってなかったから、新鮮でした。
「確かに。Keikoさんが歌うくらいの音域でメロディが動いていきますしね」
◆そして、ファンのリクエストでぶっちぎり上位だったという「ARIA」の歌唱では、なんともいえない緊張感が漲っているように感じました。
「"ARIA"はね……やっぱり特別な曲なんですよね。HikaruがKalafinaとして初めて歌った曲で。その時の想いとか、それから今に至るまでの想いを皆さんにも伝えてきましたし。それを知ってくれた上でのHikaruの"ARIA"を聴いてくれたからこその空気感、だったと思います。"ARIA"は……というか梶浦さんの楽曲はそうなんですけれど、フレーズのセンテンスが短いので、そこに聴いてくださる皆さんの想像

の余地が生まれるんですよね。そこに皆さんが想う景色や想いが映されるから、ひとりひとりの“ARIA”像があって。聴いた時のひとりひとりの想いだったり、その時の環境だったりが重なっていく曲なんですよね。“ARIA”も、“sprinter”もそうなんですけど、自分の心の中を見ることになってしまう。皆さん、そういう表情をされていらっしゃいました」

◆尊かったです。思わず感極まりました。Hikaruちゃんもちょっとグッと来ていたように見えました。

「そりゃぁね……。曲に想い入れがありすぎてね～(照笑)。ちょっと特別ですよね」

◆そこからの洋楽コーナー！　さすがの英詞歌唱でした！

「学生時代の学びが少しは活かされていたならいいんですが……。洋楽はクリスマスライブでちょっと歌ってきたくらいで、これまであまりやったことがなかったんですけど、せっかくなので挑戦してみました」

◆ビートルズで「Blackbird」がセレクトされてくるとは思ってなくて。とても優しい響きの歌声に、癒されました。

「Kalafinaでもあまりやったことのない歌唱法で歌いました。ほぼ息!っていうエアリーな発声法。初めて人前であんな風に歌いましたね」

◆続いて、「Honesty」と「Just The Way You Are」というビリー・ジョエル2連発で名演を届けてくれて。洋楽だからこそ、歌声の多彩さ、表現の幅の広がりが自然に感じられました。

「よかったです！　洋楽ブロックでほんわかしたところで、また次はディープに落としましたけど(笑)」

◆はい。続いては、アニソンブロックでしたね。

「やっぱりね、Kalafina曲以外では、アニソンのリクエストがめちゃくちゃ多かったんですよね(笑)」

◆皆さんお馴染みの定番曲と、知る人ぞ知る名曲というポイントを押さえたセレクトでした。「History Maker」は個人的に好きな曲だったので、Hikaruちゃんの歌唱で味わえて、とても嬉しかったです。

「完全に俺得の選曲でした(笑)。実は、私の私によるマイリクエストなんですよ。『ユーリ!!! on ICE』というアニメのOP主題歌で原曲はディーン・フジオカさんが歌っていらっしゃるんですが、タイトル通り、“歴史を作る人”の歌詞ですし、そういう面でも、今のHikaruにちょうどいいなって思って。自分のKalafinaとしての10年の歴史に想いを馳せながら、これからも自分の歴史を作るんだ、という想いを込めて、全魂で歌いました」

◆そしてラストの「sprinter」。Hikaruちゃんの芯を感じる歌声と、不在の存在感を感じさせるようなアレンジになっていたのが印象的でした。

「……やっぱりね、“sprinter”はね、難しい!　アレンジをどうするかも櫻田さんとすごく悩んだんです。元々が歌い繋いでいく楽曲だから。でも、皆さんからのリクエストで、”sprinter”と“ARIA”がダントツで1位、2位だったので、どうしても歌いたい!って思っていて。結果的に、Hikaruがひとりで歌うにはこのアレンジしかない、という形でやらせてもらえたと思っています。Keikoさんのパートも、Wakanaさんのパートもちょっとずつ歌わせてもらって。いやー、それにしても難しかった～!」

◆歌自体も難しいですし、自分自身の気持ちの落とし込み方というか、どう歌うのか、という解釈が……。

「歌っていると気持ちが乗っちゃうからね……いろんな10年の思い出が全ノリした“sprinter”でしたね」

◆ジェットコースターのようなライブコーナーでした。緩急はありつつも、ぐおーっと心の中が盛り上がったまま、あっという間に終わるというか。

「それは狙いでもありました。ライブコーナーはMCも短めにして。集中したかったんです。そして、最後の最後は、皆さんを出口でお見送りさせていただきました。東京でしか開催できなかったですし、来てくださった皆さんにできる限りでの最大の感謝の気持ちをお伝えしたくて!」

◆ポストカードを4種類、ランダムで手渡しされていましたね。

「4種類のポストカードに、メッセージは6種類からひとつを選んで、あと、サインと日付を直筆で書きました。なんというか、気持ちがね、一個の言葉じゃおさまらなくって。届けたい言葉がいくつか思い浮かんでしまって……。それであんなにパターンがたくさんになっちゃった(笑)」

◆皆さん、「印刷じゃなくて手書き!?」と驚かれていたと思います。さて、ディープすぎるバースデーイベント、終えてみて、改めての今、感じていることはありますか?

「イベントの内容を練ったり、ライブの練習をする準備期間が、自分の人生を振り返るような時間でもあって。自分にとっても大事なイベントだったなって思います。そして、ひとりでステージに立つというのは、今まで感じたことのない気持ちがありましたね。いただくアンケートに書いてあるメッセージにしても、いつもはKalafinaの3人に向けての言葉なんですけど、今回はすべてHikaruに向けた言葉で。それは不思議な感覚です。ひとりで歩き始めて、まだ“ピヨ……”くらいの雛で、まだ生まれたてでプルプルしている状態なんですけど、ここから歩いていかねば、という。一度、自分をリセットして歩む道を考えていきたいな、と思いましたね。いろんな気付きのあったイベントでした」

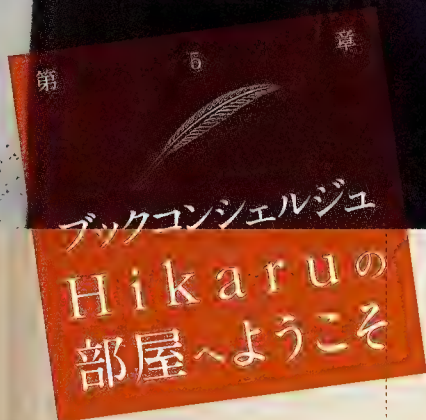
◆より一層パワーアップした次のタイミングでのバースデーイベントを楽しみにしつつ、今後のHikaruちゃんの歩みにも期待しています。

「まだまだ人生これから長いですし、人生っていろんなことが起こるんだなっていうのを改めて感じたし、起きたことに対して自分がどうしていくのか、というのを考えて、自分なりに真っ直ぐに受けとめて生きていきたいっていうのがHikaruのひとつの信念なので。それを曲げずにどういう生き方を選ぶのかをここからの一歩で考えたいと思います」

第 5 章

ブックコンシェルジュ Hikaruの部屋へようこそ

酷暑を乗り越えたと思えば、何度も台風に襲われ、秋らしさをあまり感じられないまま冬の気配を感じる今日この頃。今号も、Hikaru連載は本編と番外編の2本立てでお届けします。まずは、クール&ミステリアスなフォトと共に、オススメの「バトル・アクション作品」をご紹介!

Pnoto ⇒ 上條 遼

バトル・アクション作品

桃組プラス戦記／左近堂絵里
クイーンズ・クオリティ／最富キョウスケ
LOVELESS／高河ゆん
蝶々事件／硝音あや

❶「桃組プラス戦記」　著:左近堂絵里

元々は『月刊ASKA』で連載されていて、現在は『コミックNewtype』(KADOKAWA)で連載中の作品です。物語のベースは、「桃太郎」とか「一寸法師」とかのいわゆる昔話です。主人公・桃園祐喜は「桃太郎」の生まれ変わりで、前世で退治した鬼の呪いのせいで、そのままだと18歳までに死んでしまう、という設定。仲間には、サル・キジ・イヌの生まれ変わりのキャラクターがいます。主人公の子が生き延びるためには、いろんな鬼に会って条件をクリアして呪いを解いていかなきゃならなくて。笑えるギャグ要素もあり、かっこいい戦闘シーンもあり、人の気持ちを汲んでいくところもあって。ストーリーもちゃんと読ませるものがあるので、単にバトルしているだけ、とも違っていて。Hikaruは単行本で読み進めているんですけれど、表紙の絵柄がとても豪華で美しいんですね。たまに表紙の一枚画イラストと中身の絵柄のイメージがちょっと違うかも?というタイプの方がいらっしゃいますが、そういうパターンではないです。マンガそのものもすごくしっかり描き込まれていて見応えと読み応えがたっぷりです! 敵である鬼側のキャラクターもたくさんいるし、「サルカニ合戦」のカニとか、「花咲か爺さん」に出てきた犬とか、「舌切り雀」の雀とか、「金太郎」とか(笑)。あらゆる昔話の生まれ変わり設定のキャラがたくさん出てくるので、飽きないですし、必ず誰かは推せると思います。ただ、「このキャラの生まれ変わりがこのルックス!? 美形!」みたいなのは、少女マンガなので(笑)多々ありますけど、そこも含めて面白く読んでもらえるんじゃないかなって。最初は表紙買いだったんですよ。この表紙めちゃキレイだなぁって思って手に取って、裏表紙に書いてあるあらすじを読んだらピンと来まして。まだ読んだことないなーという方で、ちょっとでも興味を持たれたら、ぜひ読んでみてほしいです! 今、単行本で18巻くらいまで出ているはずなので、一気読みできますよ~。面白いとわかっているマンガを18冊分、一気に読めるなんて幸せすぎます(笑)。

❷「クイーンズ・クオリティ」　著:最富キョウスケ

『QQスイーパー』という前身にあたる作品が全3巻で出ていまして、今は続編にあたる『クイーンズ・クオリティ』というマンガが『ベツコミ』(小学館)で連載中です。単行本では7巻ほど続いています。このお話は、人の心の闇を浄化する能力を持った人達のお話。深層心理の中で闘っていくんですけど、その能力をちゃんと発揮するためには自分自身もキレイな状態でいなくてはならないっていう設定で。ヒロイン・文は現実世界でも修行のように日々掃除をしてるんです(笑)。文はいろいろ事情があって、その浄化の能力がある一族のお家に居候しているんですけど、実は彼女には秘められた能力が眠っていて……という。できれば前作『QQスイーパー』から読んでもらったほうがおもしろいかも。ちょっともどかしいLOVE要素も入っているのでね。そこもキュンキュンしてもらえればと思います!

❸「LOVELESS」　著:高河ゆん

初めて読んだ時、Hikaruの中に新しい風が吹いた記念すべき作品です。高河ゆんさんの作品に初めて触れたのが『LOVELESS』(コミックZERO-SUM連載／一迅社)でした。それまではいわゆるTHE・少女マンガをメインに読んでいたので、『LOVELESS』のコミックスは判型がちょっと大きくて、それだけでちょっと大人な感じがしました。そして、物語の世界観や設定、ストーリー、描写など、今まで読んだ

ことのないような内容で、絵がとてもかわいくてキレイで。キャラクター造形の面でも、人間なのに子供には猫耳と尻尾が生えていて、大人になるとその耳と尻尾がなくなる、とか、なにもかもがSFファンタジーの世界。初めて読んだ時、「なんだろう、作品に流れるこの焦燥感は!?」と衝撃を受けました。キャラクターは常になにかに飢えているし、いつも争っていて、痛々しくて、切なくて。学校が舞台の男女青春学園ラブコメというような話ではないので、なかなか簡潔に説明することが難しいんですけど……。主人公の男の子·立夏は2年前に記憶喪失になって、それまでとまるで別の人格になってしまうんですね。親からも理解されず疎まれていた立夏を守っていたのが、兄·清明だったんですが、ある時、清明が何者かに殺されてしまう。誰がなぜ兄を殺したのか?という真相を探るために、立夏は言葉やイメージの強さで敵を倒していく"スペルバトル"での闘いに身を投じていくんですが……という。人間関係や設定が入り組んでいるんですけど、一度ハマると抜け出せないおもしろさです! 現在コミックスが13巻まで出ているんですけど、1冊ずつの刊行ペースがゆるやかなので、リアルタイムで追いかけていると非常にジリジリさせられます(笑)。が、今なら13巻分が一気に読めるのでオススメです!

❹「蝶々事件」 著:硝音あや

昭和初期が舞台のアクション·ミステリ·ラブロマンス作品です。育ての親が死んでしまい、身よりのないヒロイン·えれなは横浜にある全寮制の女学校に編入することになるんですが、そこで巷を賑わす猟奇的な殺人事件に巻き込まれてしまって……というお話。少女マンガと乙女ゲームのコラボ企画の作品なので、絵柄はとても美しく、登場する男性キャラクターはイケメンばかりです(笑)。レトロな時代設定なので、Hikaru的にはそこが好みなんですよね。時代設定のおかげか、男性に硬派なキャラが多くてポイント高いです! 基本的にはヒロインが通っている女学校が舞台で、そこでいわゆる"S"と呼ばれる、先輩と後輩の師弟関係というか、疑似姉妹関係が結ばれているんですけど、ヒロイン·えれなの美しい"お姉様"が実は……!?という。あぁー、そこは言えない! 全4巻で最近完結したばかりなので、サクっと読めちゃいます。

こぼれネタ

ちょこっとバトルもある作品

憂国のモリアーティ/原案:コナン·ドイル(「シャーロック·ホームズ」シリーズ) 構成:竹内良輔 漫画:三好 輝
ファイブ/フルカワシオリ

◆「憂国のモリアーティ」 原案:コナン·ドイル(「シャーロック·ホームズ」シリーズ) 構成:竹内良輔 漫画:三好 輝

まず『ジャンプ·スクエア』(集英社)で連載中の今注目のマンガです。「シャーロック·ホームズ」が元々好きなんです。本屋さんで「モリアーティ!? 敵側が主人公とは!?」と驚いて、思わず買って読んだらおもしろかった〜! 「シャーロック·ホームズ」を読んだことがある人なら、かなりいろんな箇所で「おおー!」となる要素がいっぱい散りばめられています。"原案:コナン·ドイル"とクレジットされているだけのことはあるな、っていう。原作のホームズの時代、19世紀末のロンドンが舞台なのでそれも嬉しいです。絵柄もとっつきやすく、ていねいに描かれていますし、ミステリ好きには絶対オススメ! 男性も女性も子供も大人も読めるおもしろさがある作品です。アニメ化しそうな匂いがあっていろんな意味でソワソワしています(笑)。

◆「ファイブ」著:フルカワシオリ

現在、続編にあたる『ファイブ+』が『月刊アクション』で連載されているんですけど、本編の『ファイブ』は2004年から2011年にわたり、『別冊マーガレット』(集英社)で連載されていた少女マンガです。当時の少女マンガにしては、少年マンガ風の勢いのあるタッチと魅力的なキャラクターで人気を博した学園ラブ&アクション作品で、ドラマとか舞台にもなっていたと思います。当時の『別マ』では異色な雰囲気を放っていたんですけど、とにかくストーリーに惹きこまれる! ヒロイン·ひなは、成績順でクラスが決まる高校に転入して、男ばかりの特Aクラスに入ってしまうんです。そのクラスには"メンズ5"と呼ばれる頭脳明晰イケメン5人組がいて。その5人とひなを中心にさまざまな騒動が巻き起こる、というお話です。一応、学園ラブコメのはずなんですけど、バトル漫画か!?と思うほど、よくケンカをしてるなぁという印象です(笑)。

本日のおすすめリスト

テーマ:バトル·アクション作品	
桃組プラス戦記	左近堂絵里
クイーンズ·クオリティ	最富キョウスケ
LOVELESS	高河ゆん
蝶々事件	硝音あや
テーマ:ちょこっとバトルもある作品	
憂国のモリアーティ	原案:コナン·ドイル(「シャーロック·ホームズ」シリーズ) 構成:竹内良輔 漫画:三好輝
ファイブ	フルカワシオリ

Hikaruの「やってみました!」

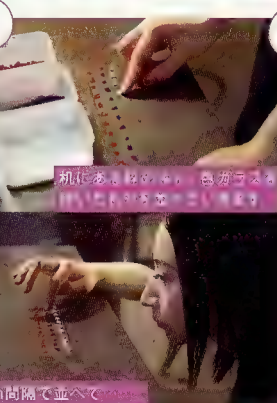
～吹きグラス体験編～

今回の連載番外編は、Hikaruの"やってみたいこと"を"やってみました"!
……というわけで、初の吹きグラス体験に挑戦! さて、どんなグラスが出来上がるのか!? 世界に一つだけのグラスを求めてスタート!

Photo → 上條 遼
Special Thanks →
吹きガラス工房 Blue Glass Arts

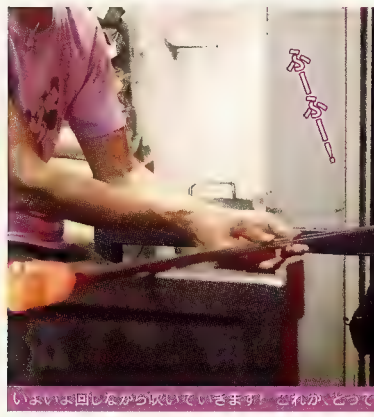
Artsさんにお邪魔しました!

Hikaruが選んだ形は……?

グラスにつけたい色を

5mm間隔で並べて……

手をつけて……

ちみつみたいにとろとろなので、回しながら形を整えます

いよいよ回しながら吹いていきます! これが、とってもカがいるんです!

くりつけていきます♪

再び吹くとこんな感じに!

続いてグラスの底を作ります。左手で回しながら、右手で平らにしていきます

少量のガラスがついている別の棒をグラスの底に接着して、最初についていた棒は「くびれ」をつけておいた部分に傷をつけ、吹き竿に振動を与えて切り離します

切り離した先端部分の穴を広げていきます。そうすると、これが飲み口に。少しずつずらしながら曲がらないようにします

うまくできました!

飲み口の広さ、グラスのフォルムを確認して……

完成しました!!

完成したグラスと共に2ショット

◆グッズといえばHikaruさん!ということで、今回はものづくりに挑戦していただきましたが、やってみようと思ったきっかけを教えてください。

「もともと、ものづくりが好きなので、ものを作る企画がしてみたいなと思ってました。ないところから作っていく作業が好きなんです!」

◆今回、グラスの形も、縦長のものから丸いものまで選べましたが、Hikaruさんはどんな観点で形を選びましたか?

「使いやすい形がいいかなと……。どんな飲み物を入れても絵になりそうで、手に持ちやすい形を選びました」

◆使いやすさを重視、ですね。作ってみて、どの工程が一番難しかったですか?

「"吹く"ところですかね。なかなか、感覚が分からないんです。直接触っているところは、調整できるんですけど、"吹く"のは吹いてから膨らむまでに、時間差があるんですね。自分が力を入れた数秒後に、膨らみだすのでその加減が難しかったです」

◆これがまた力が要るんですよね!

「そうなんです。結構しっかりと息を入れないと膨らまなくて……。"まだ吹いてください、まだ吹いてください!"ってお店の方に(笑)。結構お腹に力を入れて吹かないと膨らまない! 肺活量を試されましたね。」

◆他に大変だったことはありますか?

「ガラスがふにゃふにゃだから、"回しながら"飲み口を広げたりとか、"回しながら"吹いたりとか、"ながら作業"がすごく多かった。急いでやらなきゃだし……。今回はお店の方に手伝ってもらったのですが、これは大変だなーと思いました」

◆そんな行程を経て、無事に完成しましたね。

「はい、無事に出来ました~。もう少し色ガラス(柄)の間隔を広く取っておけばよかったかな。色ガラスを置くスペースが30センチよりも小さいところなので、ついつい詰め込みたくなっちゃいました……。幅を広めにとっておいたほうが、より柄が映えたかもしれませんね」

◆慎重な作業ですよね……。それでは最後に、今回の総評をお願いします!!

「"グラス作り"、一度やってみたらきっと楽しいと思います! まずは、工房の灼熱を味わってみるのもいいですよ(笑)」

プレゼント!!

初めてHikaruが作った"世界で一つだけのグラス"を、1名様にプレゼントいたします!
【応募方法】
Harmonyサイトにログインしていただき、トップページの「Hikaruの"やってみました!" 世界で一つだけのグラスプレゼント」バナーよりご応募ください。
応募締切:11月30日(金)まで

Information
Harmony

CD

2008年のデビューからの10年間を網羅した初のAll Time Best
Kalafina「Kalafina All Time Best 2008-2018」好評発売中!!

デビュー曲「oblivious」から全36曲をリマスタリングにて収録(CD3枚組)。
完全生産限定盤には2018年1月23日(火)に東京・日本武道館で行われた「Kalafina 10th Anniversary LIVE 2018 at 日本武道館」の模様をライブ盤CDとして初パッケージ化(CD3枚組)。さらにHistory Photo BookとともにBOX仕様にて発売。

完全生産限定盤
(VVCL-1332〜1337)
・CD6枚組
(デビュー曲「oblivious」から全36曲収録、
「Kalafina 10th Anniversary LIVE 2018 at 日本武道館」ライブ盤)
・History Photo Book同封
・BOX仕様
・10,800円(税込)

通常盤
(VVCL-1338〜1340)
・CD3枚組
(デビュー曲「oblivious」から全36曲収録)
・5,400円(税込)

各種手続き方法

◆更新手続き方法
継続用紙の発送はございません。
Harmonyサイトのマイページ、またはお手元に届く発送物封筒のラベルに会員期限が掲載されています。ご確認の上、会員期限が切れる前に継続手続きをして下さい。
メールアドレスをご登録されている会員様へは会員期限が近くなりましたら、メール配信にて更新手続きのご案内をさせていただきます。
〈PC/スマートフォンからの更新方法〉
お客様の更新期限の2ヶ月前から更新が可能です。(期限が2018年6月30日の場合、2018年5月1日から更新が可能です)
更新期間になりますと、Harmonyサイト内のマイページに『更新ボタン』が表示されます。
更新ボタンよりお支払のお手続きを行って下さい。
●クレジットカード決済の場合
お客様のクレジットカード番号など必要情報をご入力ください。
即時決済となります。
●コンビニ決済の場合
お支払いただくコンビニを選択してください。
お申込みが完了いたしましたら申込み完了メールが送信されますので、メールに記載の受付番号にて、お支払期限内にご選択いただいたコンビニにてお支払い下さい。
(お支払期限を過ぎますとお申込みは無効となりますので、再度マイページより更新お手続きを行って下さい)
メールが届かなかった・消去してしまった場合は、マイページTOPに受付番号・支払期限が表示されておりますので、そちらをご確認下さい。
〈PC・スマートフォンをご利用不可能な方の更新方法〉
郵便振替で更新手続きをして下さい。
※HarmonyはローソンのLoppiからはお手続きいただけません。
口座番号:00100-9-696779 加入者名:Harmony　振込金額:4,000円
通信欄:会員番号・お名前・「継続会費」、とご記入下さい。
ご依頼人:お名前・ご住所・お電話番号をご記入下さい。
※必ず郵便局の払込票を使ってお振込み下さい。
※ATMでキャッシュカードを使ってご入金されますと、必要事項が記入できませんのでご注意下さい。
※郵便振替でお手続きの場合は、更新手続き完了までに少々お時間をいただきます。

◆登録内容の変更
お引っ越し等でご住所などに変更がある場合は、下記の方法でお早めに登録内容の変更をして下さい。
〈PC・スマートフォンをご利用可能な方〉
Harmonyサイトのマイページよりご変更のお手続きをお願いいたします。
〈手順〉
Harmonyサイトにアクセス
⇒ログインボタンからログイン⇒マイページにアクセス⇒『登録個人情報』ボタンから『編集』へ進む
⇒メールアドレス・パスワード・姓・ご住所・お電話番号などを変更⇒『保存』を押すと変更が保存されます
※お名前や生年月日などマイページで変更できない会員情報の修正依頼は、サイト下部「よくあるご質問」内のお問い合わせフォームより、会員番号・お名前と修正希望の内容をご記入の上ご連絡ください。
〈PC・スマートフォンをご利用不可能な方〉
Harmonyまでおハガキで、会員番号・お名前と修正希望の内容をご連絡ください。
※おハガキで変更届けをいただく場合は、登録内容反映までに少々お時間をいただきます。

◆お問い合わせ先
●Harmonyオフィシャルサイト
https://kalafina-fc-harmony.jp/
●フォームでのお問い合わせ
https://kalafina-fc-harmony.jp/contact
Harmonyサイト下部「よくあるご質問」内⇒「お問い合わせフォーム」からお問い合わせいただけます。
●メールでのお問い合わせ
support@kalafina-harmony.agent-sk.com
●電話でのお問い合わせ
03-3796-8720(平日11時〜18時)
●郵送先
〒107-0062
東京都港区南青山3-1-31 NBF南青山ビル6階
スペースクラフト・エンタテインメント㈱
S.C.CLUB「Harmony」宛
※ファンクラブ業務以外のお問い合わせはお受けできませんのでご了承下さい。

Harmony会員のあなたへ

私、Hikaruは2018年10月20日をもちまして
株式会社スペースクラフトプロデュースを円満に退社したことを
ご報告いたします。

Kalafinaとして活動を始め、事務所にお世話になり多くの学びがあった10年間、
側にはいつもあなたがいてくださいました。だからこそ刻むことが出来た瞬間…
宝物です。あなたと向き合い、音楽を通して全力で会話することが
生きがいになっていました。

もちろん今も国内外、会える会えないに関らず、音楽と言葉、心で
繋がり支えてくださったあなたとのあたたかな記憶、縁を大切に抱いて
生きています。

7月31日のBirthday EVENTの際、ひとりでステージに立ち、向かい合ったことで、
思っていた以上に自分には10年間やってきたKalafinaが大きな存在であり、
時間であり、経験だったことを実感しました。
歌い手としての人生や自分の在り方を考える岐路に立った今、
心から真っ直ぐ表現出来る旅をしていくために自分に必要なものを
探そうと思っております。
厳しい道のりにはなりますが、これを機に改めて自分と向き合い、
あなたと誠実に向き合えるように、一歩一歩進んでいく所存です。

この10年間で出逢い、Kalafina Hikaruを愛情深く支えてくださった
あなたに心から感謝しております。
本当にありがとうございました。

では、またお会い出来る日まで。　　　　Hikaru

Harmony 会員　様

2018年11月1日

送付状

いつも Kalafina “Harmony” を応援頂きありがとうございます。
Harmony の会報5号が完成しましたので送付させて頂きます。

この度、Hikaru から皆様へのメッセージを同封させて頂きました。
皆様におかれましては大変突然のこととなりますが、
Hikaru より、最初に皆様にお伝えをしたいという強い気持ちがございましたので、このような形でお知らせすることとなりましたことを何卒ご容赦頂けますようお願い申し上げます。
また、“Harmony” におきましては、今後も変わらず Wakana の情報をお伝えして参ります。
どうか皆様の変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

次回以降も Wakana の最新情報につきましては、順次ご案内致します。
会報発送は1月下旬～2月初旬を予定しております。
どうぞ引き続き、Wakana を宜しくお願い申し上げます。

Harmony 事務局